

# 元の諸帝の文學 (一)

— 元史叢說の —

吉川幸次郎

## 一、はしがり

蒙古人であつた元の天子たちは、支那の文化に對して極めて冷淡であり、またそれを理解するだけの能力にも乏しかつた、そのため、漢文を綴ることはおろか漢文を讀解することも困難であつた、といふことがいはれてゐる。たとへば清の趙翼が、「廿二史劄記」に説くところは、さうした見解である。いはく、

元諸帝多不習漢文

元起朔方、本有語無字、太祖以來、但借用畏吾字、

以通文檄、世祖始用西僧八思巴、造蒙古字、然於漢文、則未習也、元史本紀、至元二十三年、翰林承旨

撒里蠻言、國史院纂修太祖累朝實錄、請先以畏吾字

繙譯進讀、再付纂定、元貞二年、兀都帶等進所譯太宗憲宗世祖實錄、是皆以國書進呈也、其散見於他傳者、世祖問徐世隆以堯舜禹湯爲君之道、世隆取書傳以對、帝喜曰、汝爲朕直解進讀、書成、令翰林承旨安藏、譯寫以進、曹元用奉旨譯唐貞觀政要爲國語、元明善奉武宗詔、節尙書經文、譯其關於政事者、乃舉文陞同譯、每進一篇、帝必稱善、虞集在經筵、取經史中有益於治道者、用國語漢文兩進讀、譯潤之際、務爲明白、數日乃成一篇、馬祖常亦譯皇圖大訓以進、皆見各本傳是凡進呈文字、必皆譯以國書、可知諸帝皆不習漢文也、惟裕宗爲太子時、早從姚樞寶默受孝經、及長則侍經幄者、如王恂白棟李謙宋道等、皆長在東宮備諮訪、中庶子伯必以其子阿八赤入見、太

子諭令入學、伯必即令入蒙古學、逾年再見、問所讀何書、以蒙古書對、太子曰、我命汝學漢人文字耳、此可見裕宗之留心學問、然未即位薨、以後如仁宗、最能親儒重道、然有人進大學衍義者、命詹事王約等、節而譯之、則其於漢文、蓋亦不甚深貫、至朝廷大臣、亦多用蒙古勳舊、罕有留意儒學者、世祖時尙書留夢炎等奏、江淮行省、無一人通文墨者、乃以崔或爲江淮行省左丞、或李元禮諫太后不當幸五臺、帝大怒、令丞相完澤不忽木等鞫問、不忽木以國語譯而讀之、完澤曰、吾意亦如此、是不惟帝王不習漢文、即大臣中習漢文者亦少也、如小雲石海牙、孛朮魯獅、巖巖、薩都刺等、固當爲翹楚矣、

この趙翼の説の主旨はかうである。蒙古は北方の沙漠から興起した蠻族であり、本來は文字をもたなかつた。太祖以後文書の必要が生じると、畏吾字ウイグズを借用して用を足し、また世祖が帝師八思巴に蒙古字を作らせてからは、それが國字として行はれることとなつたが漢人の文字に對しては、一向に無能力であつた。それは世祖以後の諸帝も、おぼむねさうであつて、儒臣が書物を選進した際、また經書を進講した際、みな翻譯

文が添付されてゐたと史に見えるのは、即ちその證左である。たゞ例外的に漢文に習熟したものとしては、世祖の皇太子で即位せずに死んだ眞金、すなはち裕宗だけを擧げ得る、といふのが、その所論の主旨であつて、わが羽田博士も、この趙翼の見解に賛成してゐられる。「狩野教授選歴記念支那學論叢」

この趙翼の見解は、大體論としてはもとより正しいと思はれる。ことに初期の諸帝に對しては、大體そのまゝにあてはまるに相違ない。しかしながら、では元の末期までも、ずつとさうした状態が持續されたかといへば、それは必ずしもさうでない。元末の天子たちは、むしろ漢文に對して相當の興味と能力をもつてゐたと考へるのである。

私がかく考へる最も大きな理由は、末期の諸帝が、支那の書法、すなはち支那の文字をしたゝめることに對し、いづれも相當の興味と能力とを示してゐることである。支那の文字をしたゝめるといふことは、支那の文字を読む能力、たとひ自らは綴れないまでも、他人の文章を讀解し得る能力、それを前提とすること申す迄もない。

元末諸帝の書法について、最も包括的な記載を残してゐるのは、元末明初の人、陶宗儀の著した「書史會要」である。この書物の卷七は、「大元」の書家の列傳であるが、その卷首には、英宗、文宗、庚申帝などは順帝、および順帝の太子で、のちに北元の昭宗となつた愛猷識理達臘の翰墨について次のやうに記してゐる。

英宗

蒙古氏、諱碩德八剌、仁宗子、承武仁治平之餘、海内晏清、得以怡情觚翰、嘗見宋宣和手敕卷首御題四字、又別楮上日光照吾民月色清我心十字、一琴上至治之晋四字、皆雄健縱逸、而剛毅英武之氣、發于筆端者、亦足以昭示於世也、

文宗

諱脫脫木兒、武宗子、以聰明睿知之資、入正大統、廼稽古右文、開奎章閣、置學士員、討論治道、幾致刑措、喜作字、每進用儒臣、或親御宸翰、作敕書以賜之、自寫閣記、甚有晋人法度、雲漢昭回、非臣庶所能及也、

庚申帝

諱安歡帖木爾、明宗子、天性仁恕、務以寬平致治、改奎章爲宣文、崇儒重道、尊禮舊臣、萬幾之餘、留心翰墨、所書大字、嚴正結密、非淺學可到、奎畫傳世、人知寶焉、

愛猷識理達臘

庚申帝子、風儀俊邁、性資英偉、帝於東宮建端本堂、置賢師傅以教之、知好學、喜作字、眞楷道媚、深得虞永興之妙、非工夫純熟、不能到也、

いづれも支那の文字を書くことに相當の能力、或ひは相當以上の能力をもつてゐたやうに記されてゐる。もつとも著者陶宗儀は、「南人」ながら元の遺民であり元の宮室に對しては眷戀の情を抱いてゐた人のやうである。これらの記事の中にも、さうした感情から出た掩飾の詞が全くないとは保し難い。しかしながら、その全部が掩飾の詞であると斷することも、むつかしいやうに思はれる。

もう一つ諸帝の翰墨についての包括的な記載は「國朝文類」卷四に收めた「經世大典序錄」のうち「禮典」の序録で、「御書」と題する部分である。

御書

日月之縣象、雲漢之爲章、星辰之經緯、皆天之文也、及夫河出圖、洛出書、則有以通神明之德、類萬物之情、豈非造化之繆、至是而著明歟、天子言而爲訓誥誓命、行而爲禮樂典章、何往而非文也、至於萬幾之暇、親御翰墨、則刻之琬琰、焜耀來世、亦猶天之所爲、其惟圖書乎、我國家自世祖皇帝、爰擇名儒、以傳東宮、是故裕宗皇帝之在春坊、嘗有日習傲書、藏之東觀、以示子孫、迨夫仁宗皇帝、英宗皇帝、時有宸翰、寵賜羣臣、傳至欽天統聖至德誠功大文、孝皇帝、則辭章之粹、書法之聖、度越前代帝王矣、猗歟盛哉、

これによれば、かの趙翼も「心を學問に留めた」とした裕宗眞金のほか、仁宗、英宗も、「時に宸翰ありて、群臣に寵賜したまうた」のであり、欽天統聖至德誠功大文孝皇帝、すなはち文宗に至つては、「辭章の粹、書法の聖、前代の帝王に度越したまうた」とする。「經世大典」は文宗の詞臣が撰進したものであり、この序録は、おそらく虞集の筆である。文宗の書法を「前代の帝王に度越したまふ」といふのは、もとより溢美の辭に相違ない。しかしながら、この文章全部が

溢美の辭であるとは、やはり考へにくいのである。さうして仁宗も「時に宸翰あり」といふのが、本當であるとするとするならば、元の諸帝のうち翰墨と縁を結んだものは、「書史會要」にあげた三帝一太子のほか、更に溯つて仁宗を加へ得ることになる。

私はいさゝか文献を涉獵して見た結果、「書史會要」なり「經世大典序録」の記事は、大體に於て正しいやうに思ふ。のみならず、文宗の如きは、また順帝の如きは、支那人の文學なり藝術なりを、相當高度に理解し得た文化人であつたと思ふのである。

もつとも私は、諸帝の能力は、他の北族の天子、たとへば魏の孝文帝、金の章宗、清の高宗などと比肩し得るといふのではない。それらの天子に比すれば、元の天子はやはり、趙翼のいふやうに「甚しくは深貫ならず」であつたやうである。しかしながら、同時にまた、一般に豫想されるほど「不深貫」でもない。趙翼のいふところは、楯の最も重要な一面ではあらうが、別の一面も同時に存在すると思ふのである。またその漢文に對する能力は、末期の天子ほど増してゐるかと思はれる。英宗は仁宗よりも深貫に、文宗と順帝は、

英宗よりも更に深貫なやうに思はれる。このことは元の末年の歴史を考へる上に、ある程度の關係をもつものと考へる。天子の性格は、もとより時の政治に反映し、社會に反映するものだからである。

以下、私は私の集め得た資料によつて、やゝ委細に諸帝の文學を、その翰墨を中心としつつ、考へてゆくこととする。

## 二、眞金 仁宗 英宗

まづ世祖の皇太子眞金、すなはちいはゆる裕宗皇帝が漢文に通じてゐたことは、趙翼もみとめてゐるところであるから、詳しくは説かない。いまその翰墨についてのの記事を拾へば、「元史」の嚙嚙傳には次の記事がある。

世祖以儒足以致治、命裕宗學於贊善王恂、今祕書所藏裕宗做書、當時御筆、於學生之下、親習御名習書謹呈、其敬慎如此、

つまり眞金の「做書」なるものが、嚙嚙の時代、といふのは順帝の治世であるが、その頃なほ祕書監に寶藏されてゐた。それを拜見すると、「學生眞金習書謹

呈」と署してゐられるといふのであるが、この嚙嚙傳の言葉と相應するものとしては、祕書監の掌故を記した「祕書志」がある。いはく

延祐二年七月十六日、奉集賢院割付、當年四月二十三日、木剌忽怯薛第二日、嘉禧殿内有時分、對闕閣歹院使張司農太史院樊仲信等有來、本院官曲出太保叔固學士奏過事内一件、裕宗皇帝根前說書的先生王贊善、是和許平仲先生一處衍授時曆來的、裕宗皇帝小時節讀的文書、寫來的字、更使來的一箇玉硯、一箇風字硯、王贊善收拾著來、如今他的孩兒說、不是他每合收的、將來呈獻過廢道、上位看了、奉聖旨、都教祕書監裏好生收拾者、王贊善并他父祖根底、依著姚公茂寶漢卿體例、與封贈者、您與省家文書者廢道、聖旨了也、欽此、

この文書によれば、眞金の「做書」は、元來はその師、王恂の家に藏せられてゐたが、王恂の死後、その遺族は、私家に藏するはおそれ多しと、仁宗の延祐二年に至り、眞金の讀んだ本、使つた硯と共に、朝廷に献上した。朝廷はそれを受納し、祕書監に保管を命じたわけである。またこれらの物件の受取りとして、祕

書郎が上つた文書も、「祕書志」の同じ巻に見える。

延祐二年九月初五日、祕書郎呈、奉指揮發下裕宗皇

帝書硯、從實收管、

孝經三冊不全

論語七冊不全

小學二冊不全

周易一冊不全

唐鑑六冊不全

孝經卷子一個不全

做書一卷零一幅

玉硯一個匣全微有損

風字硯一個

またこの「做書一卷零一幅」が、泰定の頃にも、至正の頃にも、祕書監にあつたむねはおなじく「祕書志」に見えてをり、「經世大典序錄」に、「裕宗皇帝之在春坊、嘗有日習做書」と見えるものも、これを指すに相違ない。「做書」といふ言葉は、他に用例を知らぬが、

手本をまねて書いた手習草紙といふことでもあらうか。これは單なる想像であるが、眞金の筆蹟として、さうしたものしか傳はつてゐなかつたとすれば、或ひ

は眞金の漢學は、一般の豫想に反し、實はさしたることもなかつたかも知れぬ。なほ眞僞のほどはもとより定かならぬが、眞金は生れつきの不具で嘩であつたといふ風説が、葉子奇の「草木子」四卷に見えてゐる。

次に、眞金の第三子であり、世祖の皇孫として世祖のあとをついだ成宗皇帝鐵穆耳、また眞金の孫、世祖の曾孫として、成宗のあとをついだ武宗皇帝海山、この二帝については、寡聞の及ぶところ、翰墨に關する記事は何もなく、「經世大典序錄」にも全く言及しない。おそらく二帝は翰墨を御することが出来なかつたのであらう。もし宸翰があれば、「序錄」の筆者は、鬼の首でも取つたやうに書き立てた筈である。ことに武宗は文宗の父である。父皇の宸翰があつたとすれば、文宗の詞臣たちは、何をおいても言及すべきところである。しかるに隻字もふれてゐないのは、この二帝はなほ支那の翰墨と縁を結ぶに至らなかつたことを示すものと斷じてよからう。

ところで、武宗の次に立つたその弟、仁宗皇帝愛育黎拔力八達は、「時に宸翰の、群臣に寵賜するものあり」と「經世大典序錄」に見えること、前にあげた通

りであるが、「序録」のこの言葉と相印證する文献が他にもある。

その一は、「元史」の李孟傳に、帝が李孟に與へた寵遇を叙して、

又圖其像、勅詞臣爲之贊、及御書秋谷二字、識以璽而賜之、

といふことである。李孟は仁宗が諸王であつた頃からの師傅であつて、即位ののちは儒臣として信賴の厚かつた人物である。「秋谷」といふのはその號であるが仁宗はその號なる「秋谷」の二字を畫像の上に書いて與へたのである。

その二は、鄧文原の詩に、仁宗の宸翰を詠じたものがあることである。鄧氏の詩の全集を、私は見ることが出来ない。いま顧嗣立の「元詩選二集」の丙に見えたものによる。

#### 奉題延祐宸翰并序

欽惟仁宗、上承祖武、蒐羅俊彦、求治靡寧、尤尊禮儒臣、務敦風化、由是治書侍御史臣郭貫、擢禮部尙書、凡在選者六人、惟貫進秩有加、親灑宸翰、昭示龍光、忝備臣僚、咸增鼓舞、集賢直學士

臣鄧文原、謹拜手稽首而作詩曰、

宵旰需賢表薦紳、秩宗首選贊華勛、官聯天府璇璣象、帝闈河圖琬琰文、曾聽蕭韶瞻曉日、仰攀弓劍泣秋雲、小臣作頌稱仁聖、湛露承恩未足云、

要するに、郭貫を禮部尙書に拔擢する際に與へた宸翰を詠じたものであるか、郭貫は「元史」卷一百七十四に傳があり、至大四年のこととして、

除禮部尙書、帝親書其官階、曰嘉議大夫、以授有司、

と見える。文原の詠するものは、すなはちこの「嘉議大夫」の四字であらう。「元史百官志」によれば、禮部尙書は正三品であり、嘉議大夫は正三品の散官である。

その三は、袁桷の「清容居士集」卷十にも、仁宗御書の贊が見えることである。

#### 仁廟御書除官贊

於赫仁考、御龍中天、追琢王度、左右惟賢、思柔俊髦、嘉量達權、稽古九官、匪曰敘遷、嚴嚴秩宗、維直且清、佐理大政、宰士是程、皇畿撫穰、具瞻靡輕、率彼緇流、出納糾繩、八柄馭臣、首爵以貴、或

超或常、執管淵思、昭哉雲章、銖黍奠置、勿私以恩、不悅其媚、番番老臣、卒乘國鈞、山立陽明、如歲之春、帝賓于天、執簡涕淪、虹光徹楹、萬億日新、

この御書の内容は、「嚴嚴たる秩宗」といふ句から推して、すなはち上にいふ郭貫の除書であり、つまり鄧文原の詠じた宸翰と同じものに賛をしたと思はれる。

「秩宗」が禮部尙書の雅稱であることはいふ迄もない。また「八柄もて臣を馭するには、爵を首として責きを以ふれど、或ひは超え或ひは常なり、管を執りて淵く思ひたまひしが」といふあたりも、「元史」に特にその官階、すなはち「爵」を、嘉議大夫と手書したといふのと、よく符合する。

仁宗の御書について、私の捜しおてた文献は以上の三つにとどまる。仁宗は、周知のやうに、科擧を再開した天子であつて、主としてその點から、「好儒重道」といはれるのであるが、或ひはその漢學はなほ「不甚深貫」であつたかも知れぬ。最も慎重な態度を取ればその翰墨の能力も、たゞ單に「秋谷」とか「嘉議大夫」といふやうな簡單な文字をした、め得るに過ぎなかつ

たかも知れない。

ところが、仁宗の子である英宗皇帝碩德八剌になると、資料はより豊富に、より確實になつて来る。まづ陶宗儀が英宗の書を評して、「武宗仁宗の治平の餘を承けて、海内晏清なりければ、情を觚勅に怡しませたまふを得たり、嘗て宋の宣和の手勅の卷首なる御題の四字を見ぬ、また別楮の上なる日光照吾民月色清我心の十字、琴の上なる至治之音の四字、みな雄健縱逸なり、而も剛毅英武の氣の、筆端に發したまへるものは、亦もつて世に昭示するに足れり」といつてゐるのは、前に引いた通りであるが、陶宗儀の寓目したこの數通の宸翰のことは、虞集の「道園學古錄」卷二にも見えてゐる。まづ宋の徽宗の手勅の始めに題したといふ四字の由來は、次の詩の序に詳しい。

題東平王與盛熙明手卷

宋宣和手勅一通、卷首題識四字、我朝英宗皇帝御書也、帝嘗以至治三年正月十五日、幸五華山、臣有以書獻者、丞相拜住侍側、就題以賜之、既歸第、曲先盛熙明寫金字佛書一帙贄丞相、丞相因以此卷贄之、且語以其故、至順三年三月八日、熙明屬歐陽玄記其

事於左方、

聖代御題前代勅、小臣叨備史臣書、事業久爲人土直、文章猶作世璠璵、海淪碣石圖空在、纂築祗連計已疎、誰識全燕天所斬、萬年形勝帝王居、

すなはち至治三年、英宗は五華山に幸したが、時に徽宗の手勅を献上したものがあり、帝は卷首に四字を題した上、そばに侍る丞相の拜住に與へた。拜住は開國の元勳なる木華黎國王六世の孫であり、世祖の輔臣安童の孫であるが、時に青年宰相として、好儒のほまれ高かつた。ところで拜住は邸に歸ると、あだかも盛照明から金字の佛書一帙を贈られたので、さきに賜はつた御題の卷を、その返しとして、照明に與へた。照明はおなじく「書史會要」に、

盛照明、其先曲鮮人、後居豫章、清脩謹飭、篤學多材、工翰墨、亦能通六國書、至正甲申、嘗以所編法書考八卷進、上覽之徹卷、命藏禁中、

と見える西域人であるが、書畫に長じ、その著「法書考」は「圖書考」と共に、今に傳はつてゐる。ところで、拜住からこの卷をもらつた照明は、その後文宗の至順三年に至り、文名一時に高かつた歐陽玄に、その

跋を書いてもらつたといふのが、この序の大意である。虞集の詩も歐陽の跋と時を同じくして作られたものであらうが、この序によれば、英宗が親しく漢字をしたゝめ得たことは、疑ひを容れぬ。但し、この卷今は傳はらぬやうであり、歐陽の跋も、今本の「圭齋文集」には見えない。

次に、「書史會要」に録したもう一つの宸翰については、「學古錄」に詩がある。

次句筠軒司徒足成且公所藏英宗御題之句、元題曰  
日光照吾民、月色清我心、又題琴曰、至治之音、  
化國多長日、高人侍紫宸、觀書從上相、屬筆念生民、  
雲漢文章備、風雷號令新、惟應青簡在、能載古風淳、  
御翰龍池曉、繡經鸞殿陰、雲依清靜葉、月印妙明心、  
千載堂堂去、諸天肅肅臨、朱紱誰爲鼓、至治有遺音、

序の意味は、「日光照吾民、月色清我心」といふ英宗の宸翰、また琴に題した「至治之音」といふ宸翰、それを且公なる人が所藏してゐたが、筠軒司徒が宸翰の句にもとづいてものでした詩、それに次韻して作る、といふのである。筠軒司徒、且公なる人名については

後考を待つ。

以上「學古錄」の二條は、恰かも「書史會要」の記事の注脚となるものであるが、そのほか英宗の翰墨についての記載は、袁桷の「清容居士集」卷十にも見える。「英廟御書開經偈贊」と題するものであつて、「時爲皇太子」と注する。

日升咸池、五采耀騰、昭徹水源、濁垢斯澄、維彼寸穎、執一貫萬、鉅織受形、莫測其變、驪珠陸離、光被寰海、允符龍圖、昭示億載、

「維れ彼の寸穎の、一を執りて萬を貫きたまへる、鉅なるも織きも形を受けて、其の變を測る莫し、驪珠陸離として、寰海に光被す」などといふのは、もとより揄揚の言葉であつて、その實際ではあるまい。かの陶宗儀が英宗の書法の書法を評して、「雄健縱逸なり」といひ、「而も剛毅英武の氣の、筆端に發するものは、亦もつて世に昭示するに足れり」といふのは、むしろその書が樸拙であつたことを思はず。しかし樸拙ながらも、とにかく「開經偈」をしたゝめ得た。「開經偈」とは、經文を讀誦する前につける偈であつて、「無上甚深微妙法、百千萬劫難遭遇、我今見聞得受持、

願解如來眞實義」の二十八字であるよし、塚本善隆學士から教示を受けた。

更にまた、英宗の漢字に對する能力を、もつともよく示すのは、許有壬の「至正集」卷七、十三に見えた次の文である。

恭題至治御書

英宗御極、練覈圖治、拔惡木深固之柢、取豫章大材、以梁棟一時、世則有若東平忠獻王、獨運亭毒、君臣千載之遇、魚水不足以喻之也、一日侍便殿、信手拈墨筆、作古錢形、而以朱筆分脉理爲肉好、執規矩爲之有不及者、上覽之大悅、取朱筆書皮日休詩、我愛房與杜、魁然眞宰輔、黃閣三十年、清風一萬古於其側、蓋以王爲房杜也、今慶老福德亦侍側、即以賜之、福德裝潢十襲、後至元庚辰、以歸王之子今翰林學士承旨開府儀同三司臣篤麟鐵穆爾、開府以示臣有壬、俾識其後、臣有壬於是見至治之治其有以哉、王偶拈筆、不作他象、而獨作九府錢法、非以其流布濟人、有功於世乎、上不書他語、獨書時人誦房杜之句、非有契宸衷、將責以貞觀之治乎、則是游宴之頃、未嘗有忘天下之心焉、史稱房杜不言功、持業美

効之君王、汲引士類、一善不遺、其有得於是乎、使天假以年、則唐虞都兪吁咈賡歌之風、藹然一堂之上矣、豈特房杜而已哉、噫君臣相遇、古今所難、及其相遇、而天復中道畫之、此有志之士不能不痛悼也、嗚呼惜哉、王之功業不終、天實爲之、然痛悼之餘、復有爲王賀者、玄齡後有遺愛、如晦後有隳構、今開府繼志述事、益光前烈、房杜有所不及矣、積善之家、必有餘慶、誰不信矣夫、

この文章のなから、當面の問題に必要な箇所をひろへば、次の如くである。「東平忠獻王」といふのは、やはり拜住のことであるが、ある日、拜住が便殿に侍つたみぎり、墨筆で古錢の形をえがき、朱筆で彩色を施した。それが大いに英宗の氣に入り、その朱筆を手にとると、唐の皮日休の詩をそばへ書きつけた。「吾愛房與杜、魁然眞宰輔、黃閣三十年、清風一萬古」の二十字である。さうしてそれを侍臣の福徳に與へたがのち順帝の後至元六年、福徳はそれを拜住の子なる篤麟鐵穆爾に贈り、篤麟鐵穆爾は許有壬に頼んで跋を書いてもらつた。それがこの文章である。

ところで、この文章について最も注意すべきことは

英宗が唐人の詩をそらんじてゐたことである。詩は皮日休の五古「七愛詩」の句であつて、「房杜二相國」と題するものの一節である。もつともこの詩をそらんじてゐたといふことは、必ずしも英宗の讀書の範圍の廣さを示すものではない。といふのは、この詩或ひは當時通行の「千家詩」の類に收められてゐたかと推せられるふしがあるからであつて、すなはちこの詩のうち「清風一萬古」といふ句は、范子安の竹葉舟雜劇に「倒落的播清風一萬古」と使はれてゐるのを始め、元曲に時々使はれてゐるが、元曲に引かれる詩は、大い寺小屋用の選本から出ると考へられる。おそらく英宗もさうしたお手輕な選本で覺えたのであらう。だとすると、英宗の漢文の力は、なほ大したものでなかつたといへる。のみならず英宗の漢文を讀む力が、なほ甚だおぼつかなかつたことを示す文献もある。それは「祕書志」卷五の記事であつて、いはく

延祐六年正月十六日、準中書禮部關奉中書省判送詹事院呈、延祐五年十一月三十日、禿滿迭兒詹事李家奴中議兩簡奏、皇太子坐了位次呵、合看前代帝王治天下的文書有、世祖皇帝教寶太師等秀才每、於尙書

裏棟樑出來の帝王治天下緊要の文書、又裕宗皇帝讀來的文書、并寫の倣書等、又皇帝教忽都魯禿兒迷失譯寫來の大學衍義、唐太宗帝範文書、合教太子根底放著看觀廢道、伴當每說有、是父祖教棟樑出來的前代帝王行的是來的文書、并看來的文書有、皇帝根底奏了、教取將那文書每來、太子根底放著、閑便時看呵怎生、啓呵、奉令旨、皇帝根底奏者廢道、奏呵、那般者廢道、聖旨了也、欽此、

これは、英宗がまだ仁宗の太子であつた頃の、詹事府の奏文であるが、太子の御學問所には、世祖が寶默らにお譯させになつた「尙書」の拔萃、また今上が忽都魯禿兒迷失にお譯させになつた「大學衍義」「帝範」などを、おそなへつけになつて、閑々に御覽になるがよからうといふのである。これによれば、英宗の讀書は、なほ漢文の原文よりも、むしろ蒙古語に譯されたものに、頼らねばならなかつた、といふことになる。かく英宗の漢文の力は、なほ疑問であるけれども、全く漢文に文盲であつたわけでもない。とにかく唐人の詩を何程かそらんじ、それを書き記すだけの能力をそなへてゐたこと、許有壬の跋の示す通りである。な

ほ黃潛の「中書左丞相贈孚道志仁清忠一德功臣太師開府儀同三司上柱國追封鄆王諡文忠神道碑」〔金華黃先生文集〕卷二十四すなはち拜任の神道碑には、この宸翰のことを、

命國工繪王像、勅翰林侍講學士袁桷爲之贊、御書唐皮日休吾愛房與杜魁然眞宰輔黃閣三十年清風億萬古之詩以賜之、蓋期望之也至矣、

と記してをり、卒然と讀むと、あだかも皮日休の詩は拜任の像に題されたもののやうに見えるけれども、事實はさうでなく、許有壬の跋にいふところが正しいのであらう。

なほ「元史」の元明善傳には

英宗親暎大室、禮官進祝冊、請署御名、命明善代署者三、

といふ記事がある。これは英宗が自らの名を署するところが出来なかつた資料としても受け取れさうであるけれども、實はさうでなく、むしろ明善の書法を愛し、特にそれに命するだけの鑑識をそなへてゐたと解すべきだと考へる。

要するに、英宗の翰墨に對する興味と能力は、なほ大したことはない。また英宗が弑せられたあとを承け

て立つた眞金の嫡孫、晉王也孫鐵木兒、すなはち泰定帝のときには、始めて正式に經筵が開かれたが、元の經筵のことについては、別の機會に述べるであらうから、こゝでは言及せぬこととし、問題を翰墨にかざれば、泰定帝の翰墨に關する記事は、一向に見あたらぬ。ところが泰定帝のあとを承けて立つた武宗の子、文宗皇帝圖帖穆爾に至つては、支那の翰墨、乃至はひろく漢人の文學に對し、積極的な興味を抱き、その能力もなみ／＼ならぬものがあつた。そのことは次號で説く。(昭和十八年五月二十二日)

### つ け た し

私は史學を専攻するものではない。ことに元史には熟しない。ただ頃來、東方文化研究所で、諸同僚と元人雜劇の研究に従ふうちに、その社會的背景を知る必要を感じ、元代の文献を涉獵する機會をもつこととなつたが、やがては直接雜劇に關係しない事柄についても、興味を感じるやうになり、ひ

まひまに抜き書を作つて見た。抜き書の堆積の示すところは、多少専門家の見解を補足できるものもあると思ふので、編輯者の勤めに應じ、本誌に連載させて貰ふことにする。専門家の忌憚ない批評、ことにそれが本誌上で展開されることを、望んでゐる。私がかく元代に興味を動かすに至つたのは、もとより主としては、雜劇のためであるけれども、一つにはその情勢、ことに國初の情勢が、事變後の支那と酷似することが、興味の一因であることを否定しない。なほこの一連の論文では、私は書きとめた限りの資料を、すつかり擧げることにする。もとより元代の書のことごとくを讀みつくしたわけではない。従つてここに擧げないものは私の知らないものである。この論文を本誌に發表するについては、さうした未見の資料を、細大となく教示に預りたいといふ、蟲のよい下心もある。以上、編輯者から餘白の埋め草を、求められるままに、書き足した。(同じ年の七月三十一日)